

狂言装束の構成（第2報）

— 大名（続）・小名・太郎冠者の装束 —

中野 慎子

はじめに

本稿では、第1報に続いて「入間川」・「蚊相撲」・「鞠猿」などの大名が演技中に上着を脱ぐ場合、段熨斗目の下に着用する装束と小名（主人）・太郎冠者（従者）の装束について報告する。

調査方法

第1報と同じ

Ⅲ. 白小袖

大名が演技中に上着を脱ぐ場合、段熨斗目の下に着用する白練や白綾の小袖である。

1. 形態と仕立て上がり寸法

形態は前と後を図21に示した。「紅白段熨斗目」（第1報）と異なるところは、袖付け下部が、一般の男物長着と同じ人形仕立てである。また、前下がりの形が紅白段熨斗目の場合、脇から袂先まで斜めに前が下がっているが、白小袖は脇から衽付け位置までが斜めに下がり、袂先までは同じ寸法である。仕立て上がり寸法は表4の通りである。

2. 裁断

裁ち方は図22に示した。

3. 標つけ

標つけは図23に示した。袷仕立て、通し裏であるので袖以外は表裏同様に標をつける。

4. 縫製方法

縫製方法は「紅白段熨斗目1-4」（第1報）と同じである。ただ、袖の人形部分が異なるので、袖の縫い方のみを記す。

○袖

袖口合わせ、四つ留め、袖口下の縫い方は紅白段熨斗目と同じようにして、合標まで標通りに縫う。人形は表・裏別々に縫い、表は縫い目を斜めに開き、裏は縫い目を割り、袖

下の縫い残りを四つ縫いにする。次に、丸みを整えて袖下を折り、表に返し袖付けは標通りに折っておく。

表4. 仕立て上がり寸法

名称	実測寸法(cm)	鯨尺換算寸法
袖丈	54.0	1尺4寸2分
袖口	27.0	7寸1分
袖付	42.0	1尺1寸
袖幅	34.0	9寸
袂丸み	3.8	1寸
人形	12.0	3寸2分
身丈	142.0	3尺7寸4分
衿丈	68.0	1尺7寸9分
衿肩あき	9.5	2寸5分
肩幅	34.0	9寸
後幅	34.0	9寸
前幅	32.0	8寸4分
衿下がり	24.0	6寸3分
衿下	55.0	1尺4寸5分
衿幅	17.0	4寸5分
合裷幅	15.5	4寸1分
衿幅	15.0	4寸
前下がり	4.0	1寸1分

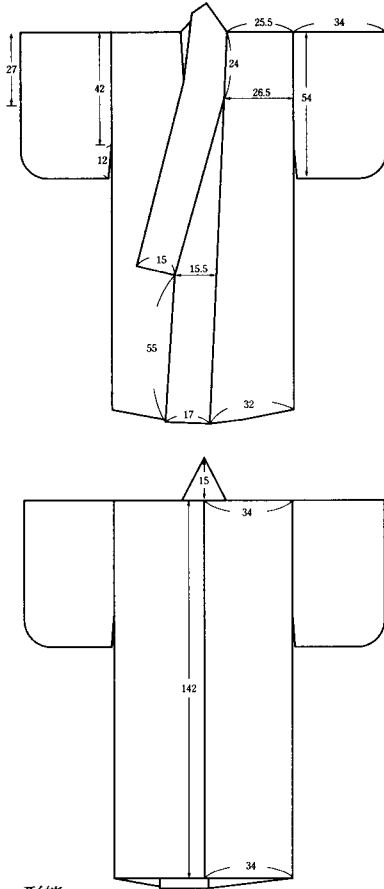
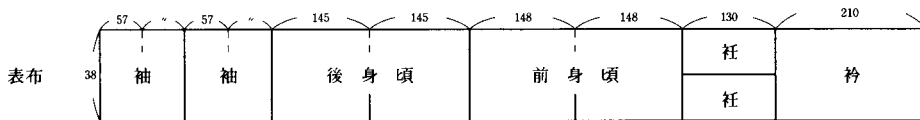


図21 形態



$$\text{袖丈} \times 4 + (\text{後身丈} + \text{前身丈}) \times 2 + \text{衿丈} + \text{衿丈} = \text{総丈}$$

$$57 \times 4 + (145 + 148) \times 2 + 130 + 210 = 1154\text{cm}$$



$$\text{袖丈} \times 4 + (\text{後身丈} + \text{前身丈}) \times 2 + \text{衿丈} = \text{総丈}$$

$$57 \times 4 + (145 + 148) \times 2 + 130 = 944\text{cm}$$

図22 裁ち方

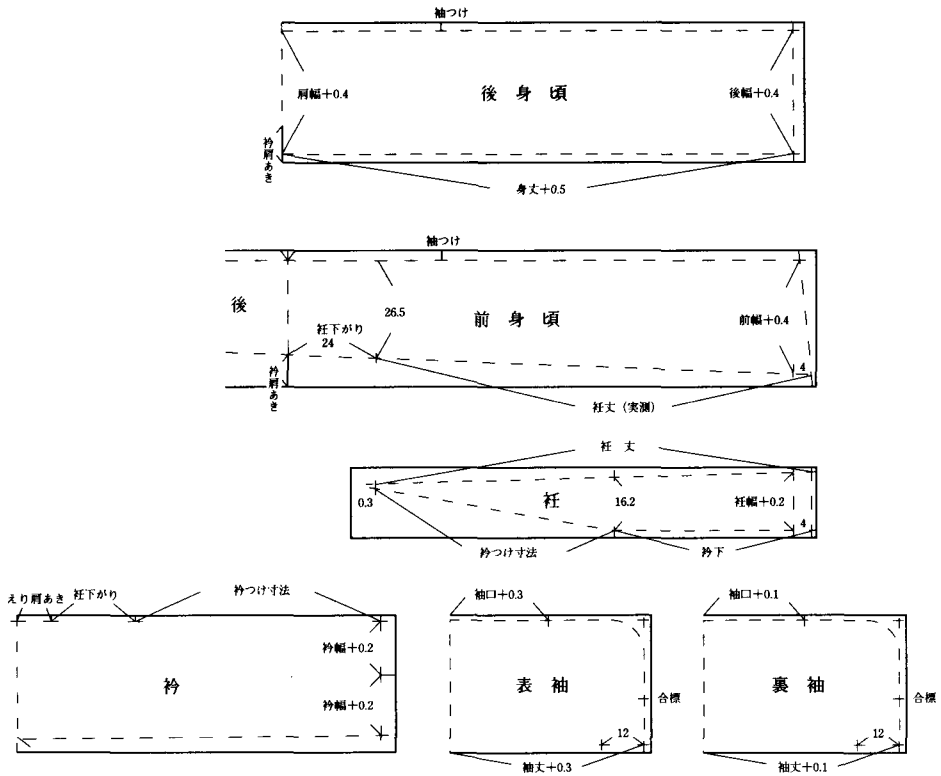


図23 標つけ

IV. 下袴

白小袖に付ける袴で小袴ともいう。表布は絹子、または、緞子、刺繍で紋を散らした袴で裏布は白絹の衿仕立てである。半袴と違い腰板のないのが特徴である。また、裾口には紐を通すための布が縫いつけられている。

1. 形態と仕立て上がり寸法

形態は前と後を図24に示した。仕立て上がり寸法は表5の通りである。

2. 裁断

表と裏の裁ち方を図25に示した。

3. 標つけ

標つけを図26に示した。裏布は前布に前接ぎ布を縫い合わせ、幅を二つに折り、表と同様に標をつける。

4. 縫製方法

○前後の布の縫い合わせ

表布は後の一幅と半幅を縫い合わせ、前は二幅を縫い合わせておく。

後の投は表布の標より0.3cm出し、裏布は0.3cm控えて縫い合わせ、縫い代は裏側に折る。表に返して裏布が0.3cm控えられる。

襦布は表布と裏布を外表にして、しつけでとじておく。

後は左脚になる方の後の表布と裏布で襦をはさみ四つ縫いをする。後の胯上は右脚の表布と裏布で左脚の表布裏布をはさみ四つ縫いをし、続けて襦も右脚の表布と裏布にはさみ、襦つけのところまで四つ縫いをする。縫い代は右脚へ折り返す。

前は左脚の前奥布の表布と裏布で襦をはさみ、さらに、左脚の胯下の表布と裏布で後右脚の表布と裏布をはさみ、胯下を四つ縫いする。縫い代は前奥布側に折る。もう一方の襦も右脚の表布と裏布にはさみ、四つ縫いし続けて胯下を四つ縫いする。縫い代は前奥布側に折る。

前胯上は左脚の表布と裏布で右胯上の表布と裏布をはさみ四つ縫いする。

右相引は前左脚の表布と裏布で後左脚の表布と裏布をはさみ四つ縫いをする。左相引は前右脚の表布と裏布で後右脚の表布と裏布をはさみ四つ縫いをする。縫い代は前布側に折る。

前の投は表布より裏布を0.3cm控えて縫う。

○前後の襷をとる

前後の襷は標通り出来上がり襷幅に折りたたみ、しつけでおさえておく。(図27)

○笹襷を縫う

笹襷は図28のように中表に折り、裏側から笹襷の標より0.5cm内側をかくしじつけで縫い、縫い代を脇側に倒す。

○裾布（紐通し）をつける

前と後の裾布は両端を1.5cm幅の三つ折りにしてまつ。紐通し口となる。

前と後を別々に表布と裾布を中表に合わせて縫う。縫い代は裾布側に折り、裾布を上にして裏側でまつりつける。

○紐づくり、紐つけ

後紐は芯布を入れ幅7cm、丈202cmの出来上がりに折る。紐の中心から左右それぞれ20cmくけ残しておく。前紐も同様に芯布を入れ幅3cm、丈432cmの出来上がりに折りくける。紐の中心から左右それぞれ23cmくけ残しておく。

後紐は腰付幅より左右5cm大きい芯布を入れる。紐つけは後紐の中心と後中心を中表にして紐を縫いつける。前紐も同様に紐の中心と前中心を中表にして縫いつける。縫い代は紐の裏側に入れてまつ。

○裾の括り緒

緒は白色の組紐、丈235cmである。

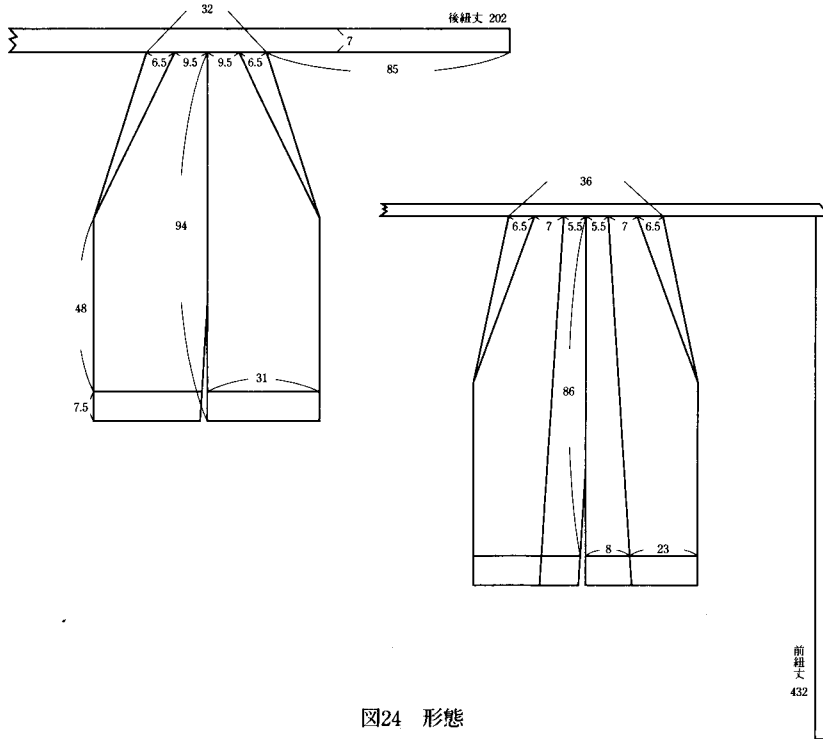
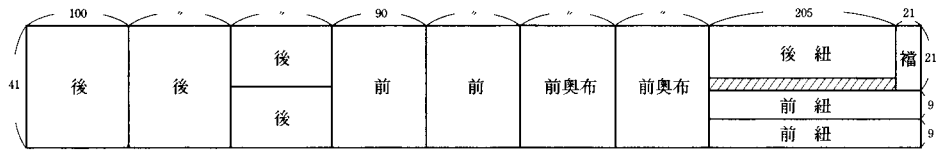


図24 形態

表5. 仕立て上がり寸法

名称	実測寸法(cm)	鯨尺換算寸法
紐 下	86.0	2尺2寸6分
相 引	48.0	1尺2寸6分
後 幅	31.0	8寸2分
後紐付幅	32.0	8寸4分
脇 幅	23.0	6寸
前紐付幅	36.0	9寸5分
笹 袷 幅	6.5	1寸7分
後 紐 幅	7.0	1寸8分
後 紐 丈	202.0	5尺3寸2分
前 紐 幅	3.0	8分
前 紐 丈	432.0	1丈1尺3寸7分

狂言装束の構成 (第2報)



表布 後丈×3 + 前丈×4 + 後紐丈 + 裾丈 = 総用布
 $100 \times 3 + 90 \times 4 + 205 + 21 = 886\text{cm}$

裏布 後丈×2 + 前丈×2 + 裾布 = 総用布
 $100 \times 2 + 90 \times 2 + 80 = 460\text{cm}$

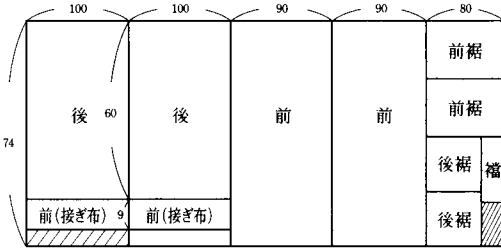


図25 裁ち方

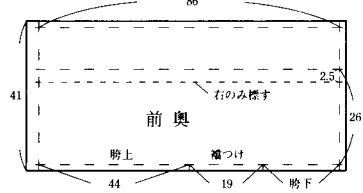
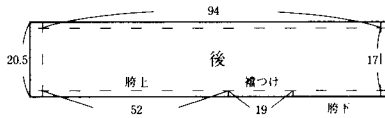
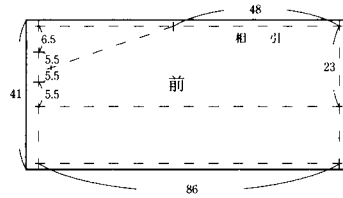
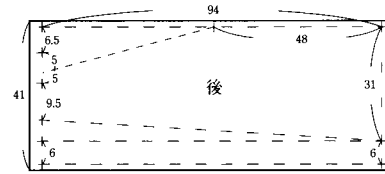


図26 標つけ

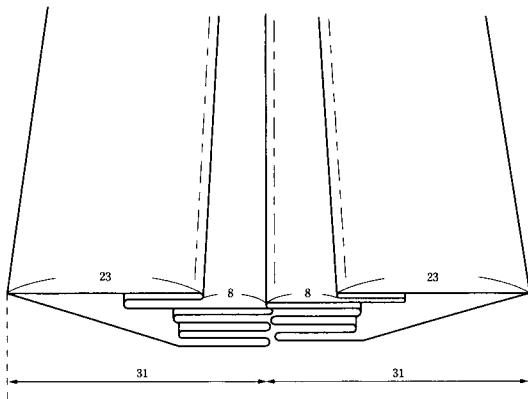


図27 装取り

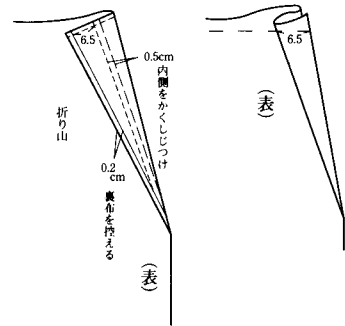


図28 裾縫の縫い方

V. 脚絆

臍にまとう筒用のもの。大蔵流では脚絆をつけ袴の裾を括る。表布は黒の縮子を用い、裏布は白絹を用いる。

1. 形態と仕立て上がり寸法

形態と仕立て上がり寸法は図29に示した。

2. 裁断

裁ち方は図30に示した。

3. 標つけ

標つけは図31に示した。

4. 縫製方法

表布と裏布を中表に合わせ、上と下を標通りに縫う。縫い代は0.2cmのきせをかけて裏側に折る。表に返して裏側が0.3cm控えられるように整える。次に脇側を縫う。表布、裏布を中表に合わせ、裏布の縫い止まりから縫い止まりまでを縫う。縫い残した部分はまつる。

紐を縫う。紐つけは赤の絹手縫い糸2本どりで図32のように飾り付けする。

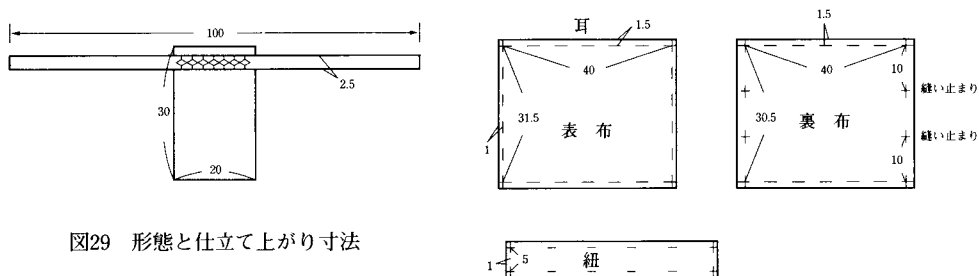


図29 形態と仕立て上がり寸法

図31 標つけ

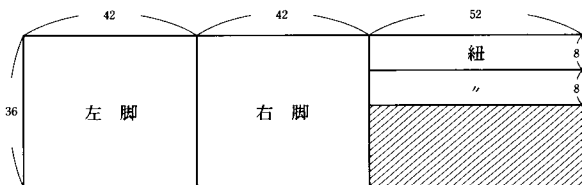


図30 裁ち方

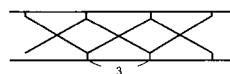


図32 紐飾り付け

小名 (主人) の装束

I. 段熨斗目

小名 (主人) の着用する段熨斗目については、形態、仕立て上がり寸法、裁断、標つけ、縫製方法は「紅白段熨斗目」(第1報)と同様である。

II. 長袴

一般に主人・亭主とよばれる登場人物、例えば、太郎冠者からして目上、年上と考えられる役柄の装束で段熨斗目の上に着用される。

長袴は同じ文様の肩衣と長袴が一对になったもので、小紋染を基本としているが中紋や腰明きなど様々である。布地は麻である。

A 肩衣

1. 形態と仕立て上がり寸法

形態は、前と後を図1に示した。仕立て上がり寸法は表1の通りである。

2. 裁断

裁ち方は図2に示した。

3. 標つけ

標つけは図3に示した。

4. 縫製方法

○身頃

後身頃の背縫いをする。縫い代は、0.2cmのきせをかけ右身頃に折り返す。後衿肩の裏側に肩当をつける。(和紙、または、残り布を用いる。大きさは、たて16cm、よこ20cm)

前肩の襷を標通りに折りたたみ、襷の部分は平らに整え襷の元のところを一針留めておく。和紙で肩の部分を裏打ちする。(図4)

後脇は0.8cmの幅に三つ折りにして、のりで接着する。後脇に続けて前肩脇も標通りに三つ折りにして、のりで接着する。

後裾は0.8cmの幅に三つ折りにして、のりで接着しておく。

前身頃は図5のように折りたたむ。襷先を前身頃の中に入れ、前身頃裏布と襷先をのりで接着する。

前裾は、標の通りに裏側に折る。衿下は衿つけ止まりに切り込みを入れ、前端を標の通りに折ってのりで接着する。

○衿つけ

衿は衿幅標の通りに折り、前身頃衿つけ標に合わせて衿つけ止まりまで縫いつける。衿先を折り、裏衿側はのりで接着する。

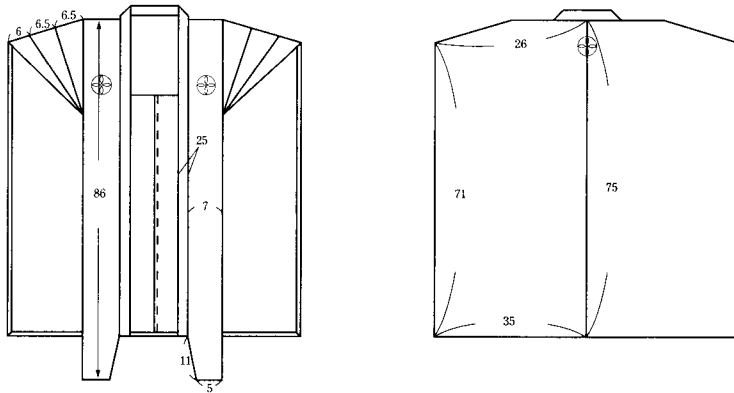
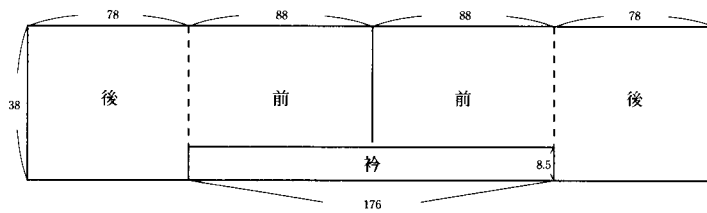


図1 形態

表1. 仕立て上がり寸法

名称	実測寸法 (cm)	鯨尺換算寸法
後身丈	75.0	1尺9寸7分
肩幅	26.0	6寸8分
裾幅	70.0	1尺8寸4分
手丈	86.0	2尺2寸6分
手幅	7.0	1寸8分
衿幅	2.5	7分
衿肩あき	9.0	2寸4分



$$\begin{aligned} & (\text{後丈} \times \text{前丈}) \times 2 = \text{総丈} \\ & (78 + 88) \times 2 = 332\text{cm} \end{aligned}$$

図2 裁ち方

表2. 仕立て上がり寸法

名称	実測寸法(cm)	鯨尺換算寸法
紐 下	148.2	3尺9寸
相 引	102.0	2尺7寸
後 幅(右)	27.5	7寸3分
後 幅(左)	30.2	8寸
腰 幅	25.0	6寸6分
脇 幅	16.0	4寸2分
前紐付幅	32.2	8寸5分
笹 鬘 幅	0	
後 紐 幅	3.0	8分
後 紐 丈	93.0	2尺4寸5分
前 紐 幅	3.0	8分
前 紐 丈	209.0	5尺5寸
腰 板 幅(上)	17.0	4寸5分
腰 板 幅(下)	25.0	6寸6分
腰板の高さ	9.0	2寸4分
附菱の幅	9.2	2寸4分
附菱の高さ	7.0	1寸8分

Ⅲ. 襟

熨斗目・箔・厚板といった着付の下に着るもの。襟は前身頃・後身頃と襟からなり、布地は晒木綿である。絹の半襟をかける。半襟の色は役柄や年齢などによって使い分けられる。例えば、大名は紅色、小名は浅黄色、太郎冠者は紺浅葱色、出家は茶、または、朋黄色、女は紅色、白練着付には白色（生成）などである。

1. 形態と仕立て上がり寸法

形態と仕立て上がり寸法は図6に示した。

2. 裁断

裁ち方は図7に示した。

3. 標つけ

標つけは図8に示した。

4. 縫製方法

襟は後中心を縫い合わせ、身頃に襟をつける。襟つけの方法は和裁の衿つけと同じである。脇と裾は三つ折りぐけにして縫い代の始末をする。半襟をかける。

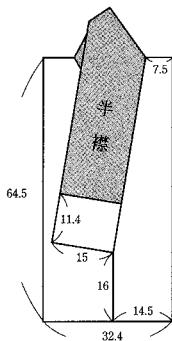
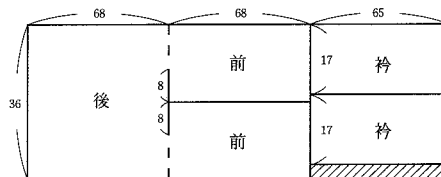


図6 形態と仕立て上がり寸法



$$\begin{aligned} \text{後丈} + \text{前丈} + \text{衿丈} &= \text{総丈} \\ 68 + 68 + 65 &= 201\text{cm} \end{aligned}$$

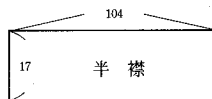


図7 裁ち方

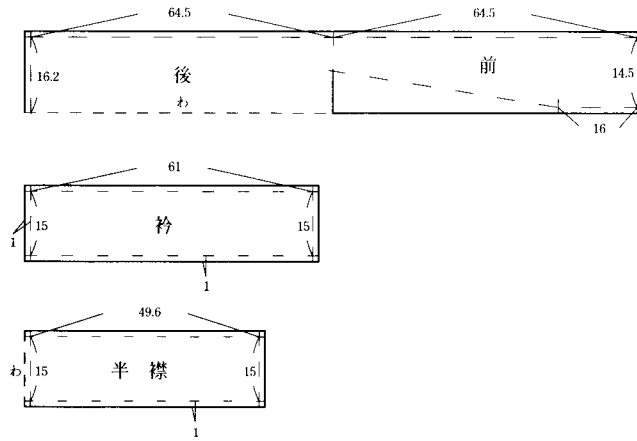


図8 標つけ

太郎冠者（従者）の装束

I. 縞熨斗目

太郎冠者が着付に用いる格子紋様の熨斗目である。布地は絹で裏布は紫色のものが用いられている。

1. 形態と仕立て上がり寸法

形態は前と後を図9に示した。「紅白段熨斗目」（第1報）と異なるところは、身丈が40cm短い。また、前下がりが紅白段熨斗目では5.7cmであるが、縞熨斗目は3.8cmと少ない。縞熨斗目は袖丈がやや短く、一般の男物長着と同じ人形仕立てである。

仕立て上がり寸法は表3に示した。

2. 裁断

袷仕立て、通し裏である。表布と裏布は同じように裁つ。裁ち方は図10に示した。

3. 標つけ

標つけは「紅白段熨斗目」（第1報）と同じ方法である。寸法は表3の仕立て上がり寸法を用いる。

4. 縫製方法

縫い方については「紅白段熨斗目Ⅰ-4」（第1報）と同じ方法である。袖については「Ⅲ. 白小袖」と同じ方法である。

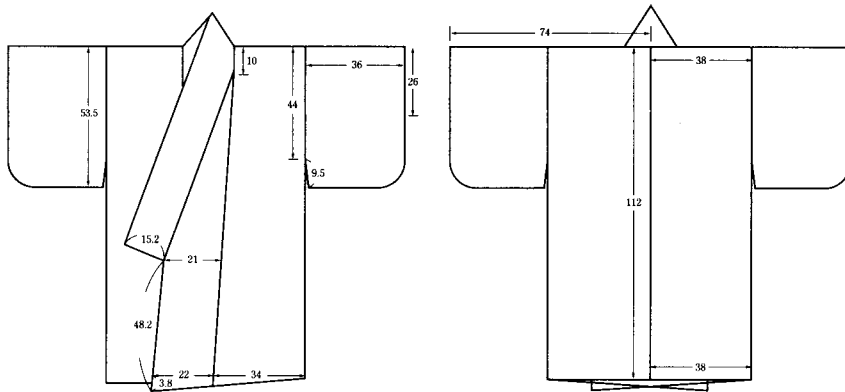


図9 形態

表3. 仕立て上がり寸法

名称	実測寸法(cm)	鯨尺換算寸法
袖 丈	53.5	1尺4寸1分
袖 口	26.0	6寸8分
袖 付	44.0	1尺1寸6分
袖 幅	36.0	9寸5分
袂 丸 み	5.6	1寸5分
人 形	9.5	2寸5分
身 丈	112.0	2尺9寸
衿 丈	74.0	1尺9寸5分
衿肩あき	9.0	2寸4分
肩 幅	38.0	1尺
後 幅	38.0	1尺
前 幅	34.0	9寸
衿下がり	10.0	2寸6分
衿 下	48.2	1尺2寸7分
衿 幅	22.0	5寸8分
合 裓 幅	21.0	5寸5分
衿 幅	15.2	4寸
前下がり	3.8	1寸

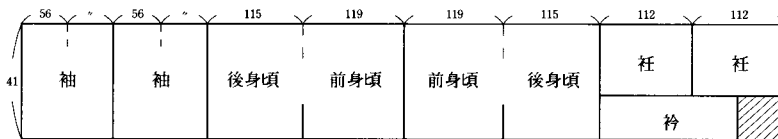


図10 裁ち方

$$\begin{aligned} \text{袖丈} \times 4 + (\text{後丈} + \text{前丈} + \text{衿丈}) \times 2 &= \text{総 丈} \\ 56 \times 4 + (115 + 119 + 112) \times 2 &= 916\text{cm} \end{aligned}$$

II. 肩衣（狂言肩衣）

太郎冠者はもちろん、庶民の扮装を代表するもので、縞熨斗目の上に着る。実測した肩衣は紋尽し紋様で狂言袴と対である。布地は麻で単仕立てである。

1. 形態と仕立て上がり寸法

形態は小名（主人）の装束「I A 肩衣」と同じである。仕立て上がり寸法は表4に示した。仕立て上がり寸法は、狂言肩衣の方が後身丈が8cm、手丈が9cm長い。また、裾幅が11.0cm、肩幅が4.0cm、衿幅が1cm広い。狂言肩衣の方が小名の肩衣に比べて大きく仕上げられている。

2. 裁断、標つけ

小名（主人）の装束「I A 肩衣」と同じ方法である。

3. 縫製方法

小名（主人）の装束「I A 肩衣」と同じ方法であるが、今回実見した肩衣の裾は三つ折りの始末はなく裁ち目のままである。

表4. 仕立て上がり寸法

名称	実測寸法(cm)	鯨尺換算寸法
後身丈	83.0	2尺1寸8分
肩幅	30.0	7寸9分
裾幅	81.0	2尺1寸3分
手丈	95.0	2尺5寸
手幅	8.0	2寸1分
衿幅	2.0	5分
衿肩あき	9.0	2寸4分

III. 半袴（狂言袴）

肩衣とともに狂言装束を代表する麻の袴である。紋様は肩衣と対の紋尽し紋様である。

1. 形態と仕立て上がり寸法

形態は前と後を図11に示した。仕上がり寸法は表5に示した。

2. 裁断

裁ち方は図12に示した。

3. 標つけ

標つけは図13に示した。

4. 縫製方法

大名装束の「ⅡB長袴」(第1報)と同じ方法であるが、笹襷はなく、後の投と同じように仕立てられている。

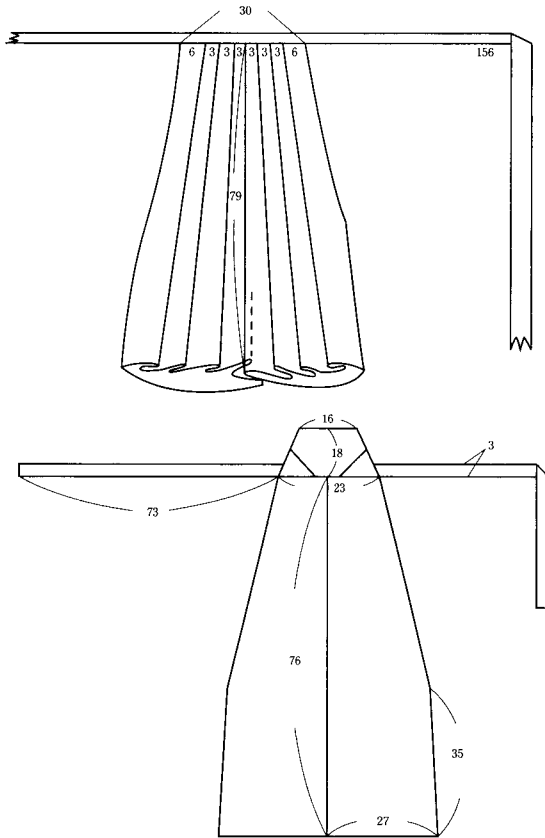
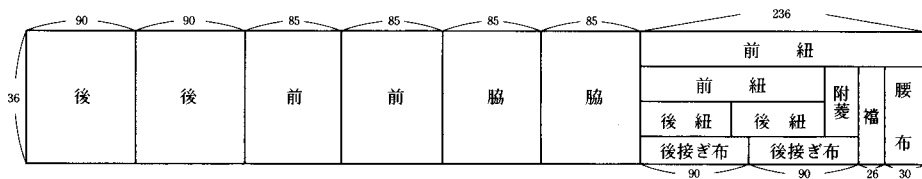


図11 形態

表5. 仕立て上がり寸法

名称	実測寸法(cm)	鯨尺換算寸法
紐 下	79.0	2尺 8分
相 引	35.0	9寸2分
後 幅	27.0	7寸1分
腰 幅	23.0	6寸
脇 幅	10.0	2寸6分
前紐付幅	30.0	7寸9分
笹 襷 幅	0	
切り上げ	0	
後紐幅	3.0	8分
後紐丈	73.0	1尺9寸2分
前紐幅	3.0	8分
前紐丈	156.0	4尺1寸
腰板幅(上)	16.0	4寸2分
腰板幅(下)	23.0	6寸
腰板の高さ	8.0	2寸1分
附菱の幅	9.0	2寸4分
附菱の高さ	7.0	1寸8分
襷	24.0	6寸3分
胯下丈	17.0	4寸5分



$$\begin{aligned}
 &(\text{後丈} + \text{前丈} + \text{脇丈}) \times 2 + \text{紐丈} = \text{総丈} \\
 &(90 + 85 + 85) \times 2 + 236 = 756\text{cm}
 \end{aligned}$$

図12 裁ち方

狂言装束の構成（第2報）

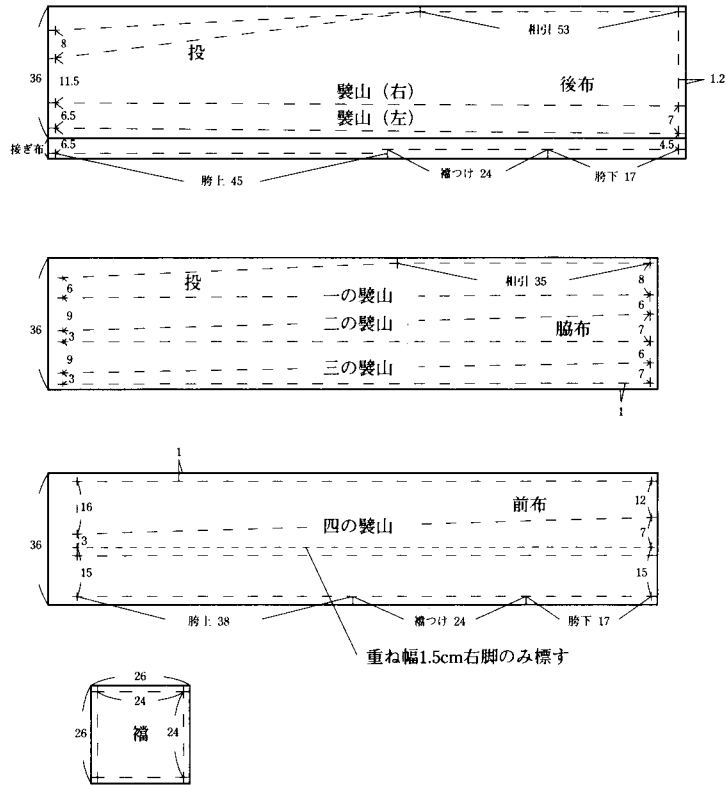


図13 標つけ

IV. 腰帯

肩衣・水衣・などの上着や半袴の上に締める帯である。腰に当たる部分と前にたれる帯の両端部分だけ、縹子や緞子などの生地には硬い芯をいれて平たくしてある。その部分に紋様を縫い取ってある紋腰帯と紋様の無い無地腰帯がある。紋は家紋風の丸紋を三つ置いたものが多く用られている。実見したのは、紋腰帯で布は白の縹子、紋は黒糸で刺繍したものである。

1. 形態と仕立て上がり寸法

形態と仕立て上がり寸法は図14に示した。

2. 縫製方法

幅を二つに折り紐丈の中心で7cmの返し口を残し1cmの縫い代で縫う。縫い代は丈を先に、幅は後にそれぞれ0.2cmのきせをかけて折り、表に返して形を整え、縫い残した返し口はくけておく。紋布部分の布はボール紙の芯を入れ紐の所定位置にのりで接着する。

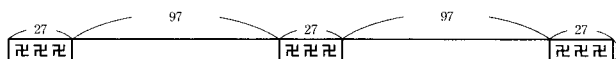


図14 形態と仕立て上がり寸法

おわりに

前回に続いて、大和座主宰安東伸元先生のご指導、大和座狂言事務所のご協力を得て、狂言衣装を被服構成の立場から実測調査を行うことが出来ました。ここに厚くお礼申し上げます。

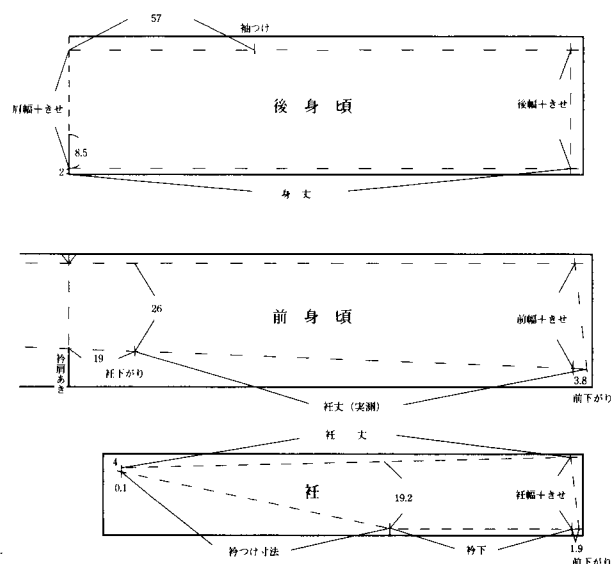
参考文献

- 1) 栗原 弘・河村まち子：「時代衣装の縫い方ー復元品を中心とした日本伝統衣服の構成技法ー」源流社（S. 59）
- 2) 切畑 健：「狂言の装束」京都書院（1993）
- 3) 古川 久・小林 貴・荻原達子：「狂言辞典（事項編）」東京堂出版（S. 51）
- 4) 小林保治・森田拾史郎：「能・狂言図典」（1999）
- 5) 権藤芳一：「狂言入門」淡交社（1996）
- 6) 増田正造：「狂言の装束」（「染織の美」14号）京都書院（S. 56）

訂正

「狂言装束の構成（第1報）」

P. 141 「図3. 標つけ」



P. 143、5 段目

Ⅱ A → A

P. 146、1 段目

Ⅲ B 下着 [長袴]
→ Ⅱ B 長袴

P. 147、「表3」1 段目

4 尺 → 4 尺 5 分